国立極地研究所
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
南極・北極科学館
Polar Science Museum

犬ぞりから雪上車へ

南極での移動手段として

南極観測事業が開始された当初、日本にとって未知の大陸であった南極での移動手段として、当時の雪上車には技術的な不安がありました。そこで、運搬量は少ないものの、危険を事前に察知できる犬が採用されたのです。

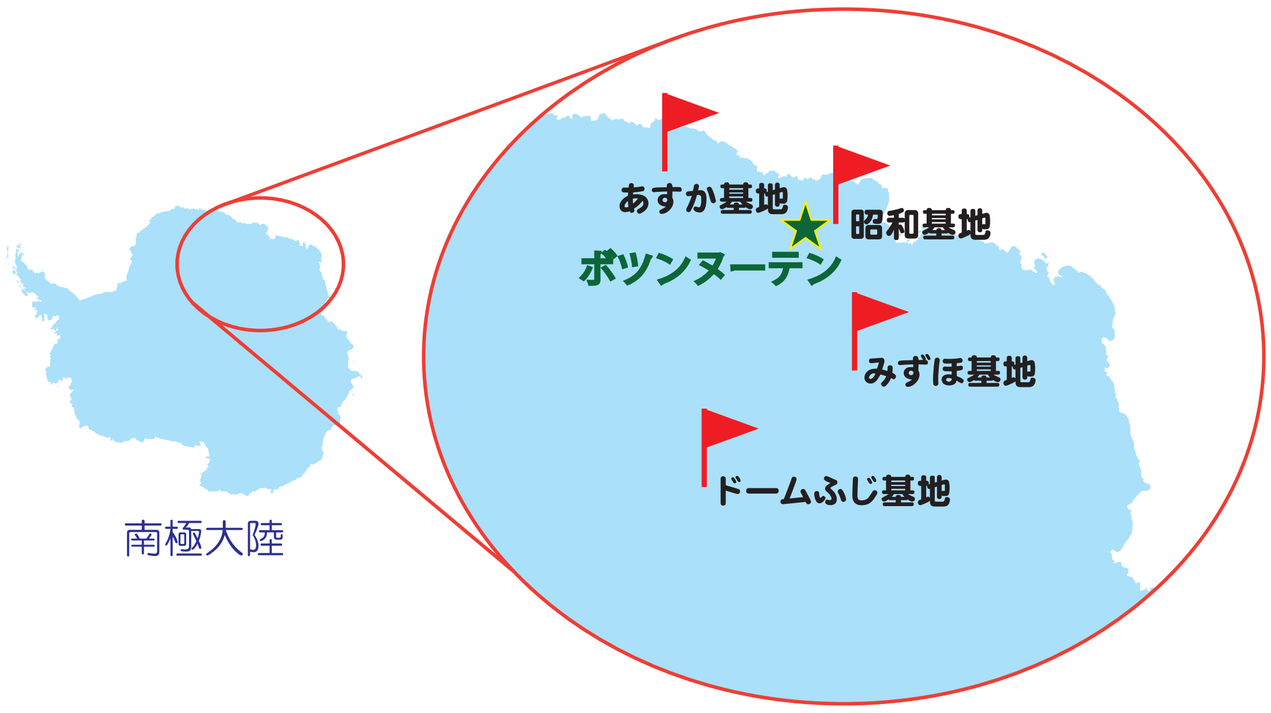
選ばれたカラフト犬たちは北海道稚内市の訓練所で犬ぞりを引く訓練を受けましたが、いざ南極で犬ぞりを引かせようとしたときには訓練から１年以上経っていたため、号令を忘れてしまっていたり、長旅で体力が衰えていたりして、訓練をやり直さなければなりませんでした。

犬にそりを引かせる形は、扇型や中心綱型などがあります（下図）。扇型はすべての犬に目が届くため、効果的に犬を制御することができますが、犬どうしのケンカや、それによるロープのもつれが起きやすい形でもあります。それを防ぐため、中心綱型の変形が多く用いられました。

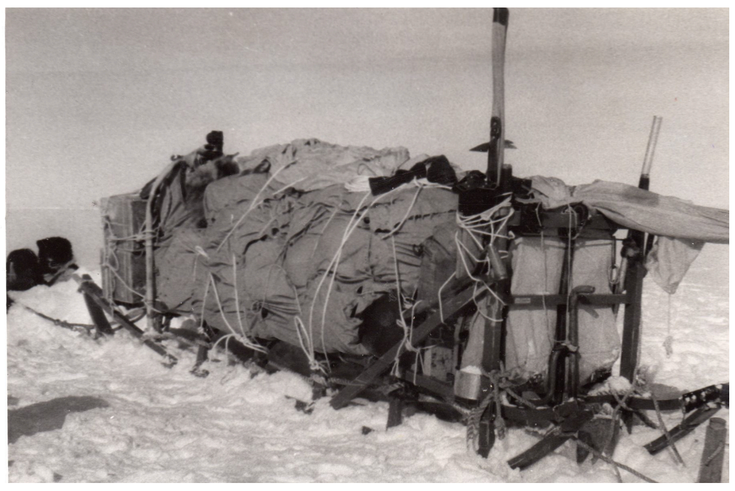
犬ぞりの引き綱の形

犬たちは機材や食料など約 500kg もの荷物を積んだそりを引き、未踏の地であった「ボツンヌーテン」という山までの調査旅行も果たしました。第１次越冬期間中のほとんどの調査旅行は犬ぞりで行われ、合計 1,600km もの距離を走りました。雪上車は合計 1,200km を走りましたが、大きな調査旅行に使われることはありませんでした。

その後も犬ぞりと雪上車は併用されましたが、雪上車の性能向上が著しく、第４次越冬隊をもって犬ぞりの使用は終了となりました。



【犬ぞりの様子】第１次隊では沿岸の調査で活用されました。



【荷物を積んだ犬ぞり】